「アルジャーノンに花束を」

古　家　由美子

チャーリーは知能に障害を持つ大人のための学校に通っていた。彼はキニアン先生や、仕事場の友達のように、かしこくなりたい、同じようになりたいと思っていた。チャーリーにとって彼らはかしこく、尊敬にも値する人たちにうつっていた。そしてチャーリーはその願いをなかえるために手術を受ける。チャーリーはその手術がどういう危険をもつか想像することもなかっただろう。ただ漠然とした恐怖感はあったにせよ、手術を受ければかしこくなる、それ以外の影響については考えもしなかっただろうし、考えることもできなかったのだろう。手術をする側でも人間に行うのは初めてのことだ。その手術を受けたアルジャノンは普通のねずみとは比較にならない程になっていた。チャーリーは手術後何度かアルジャノンと競争する。初めは負けてばかりだったが、そのうち勝つようになっていく。

チャーリーはかしこくなっていくうち、今までの友達だと思っていた人たちが自分にしていたことが、からかいや、ばかにしていたということに気づきだす。チャーリーははずかしさやら、くやしさ、悲しさで傷ついていく。純粋だった分なおさらチャーリーの心が傷ついていくのがかわいそうに思われる。手術を受けなければ味わうことのなかった始めての感情にチャーリー自身もどう対応すべきか苦しんでいるのが読みとれる。もちろん悪い感情ばかりではなかった。チャーリーはキニアン先生に恋をする。キニアン先生もかしこくなったチャーリーにひかれていく。だがこれも長くは続かない。チャーリーがかしこくなりすぎてしまった。そんな時、かつての競争相手だったアルジャノンに変化が表われてきた。チャーリーは自分にもその変化がじきに起ることを予感する。そしてその変化が表われ始める。

チャーリーは町を出る決意をする。自分がもとのチャーリーに戻る姿を見られるのに耐えられなかったからだ。チャーリーはかしこくなり一度友達だと思っていた人達に裏切られたり、知能が遅れている人に対する世間の偏見をしり傷つくが、恋をし、そして本当の友達を得た。チャーリーにとって手術を受けたことがよかったのかどうかを思うと、どちらとも思えないが、チャーリー自身よかったと思っていることを望まずにはいられない。

（指導教員　中村　敦志）